

クリスマススイブの憂鬱

福井県立藤島高等学校 前田 悠陽

幼い頃夢見ていたものが、成長するにつれ失われてゆく。そういう経験は避けては通れない、誰もが歩む道。夢が一つ、自分の中で現実に変わった瞬間、何となく、ほんの少しだけ大人になったような感覚があった。私が初めて一つの夢を失ったのは、小学二年生の冬のある日だった。クリスマススイブ、私は普段よりも早めにお風呂から上がり、早々に床に就いていた。無論、サンタクロースの来訪を、興奮冷めやらぬ思いで待っていたわけだ。この日を、何日も前から首を長くして待っていた私は、電気を消して布団の中に入っても、なかなか寝付けずにいた。そこで、ぼうっと天井を眺めていると、しばらくして誰かの足音が部屋に近づいてくるのに気付いた。足音は部屋の前で止まり、やがてその主が中に入ってくる。起きているのを悟られないよう、息を潜める。これはきつとサンタクロースだろうと、心の中で興奮しながら、その存在を背中を感じる。その時、私は自分の目でサンタクロースを見てみたいと思った。サンタクロースが枕元にプレゼントを置き、私に背中を向ける。その瞬間、音を立てないように布団から顔を出して、恐る恐る目を開いた。しかし、その時目の前に居たのは、赤い服を纏った巨体ではなく、灰色のズボンを着いた背の低い男の人だった。私は少し拍子抜けした。サンタクロースはあんなにも普通の格好をしているのか、と。翌朝、目を覚ますと、枕元には綺麗に包装されたプレゼントが置かれていた。分かつてはいたが、やはり嬉しさを抑えることが出来ずに、プレゼントを抱えて、親のいるリビングまで駆けた。しかし、リビングに入った瞬間、私は絶句した。頭の中が真っ白になり、目の前の景色が、音を立てて崩れていくように感じた。父が昨日の夜見たものと同じ、灰色のジャージを着いて椅子に腰かけていたのだ。私はすぐに理解した。途端、全身の力が抜けて、手に持っていたはずのプレゼントを、床に落とした。ゴトン、と鈍い音が朝の冷たく澄んだ空気の中で、妙に耳に響いていた。その後のことは、よく憶えていない。

今となつては、夢は全て昇華し、現実になってしまった。もう子どもに戻ることも、夢を見ることもできなくなってしまったことに、一抹の寂寥を覚える。しかし私はあの日、夢を失ったとともに、ある種の高揚感に駆られていたのも事実だった。

そして今年もまた、クリスマススイブがやって来る。街は華やかなイルミネーションに飾られ、道行く子ども達の目を輝かせている。つい先日、デパートのおもちゃ売り場を通りがかったら、その入り口のところに、大きなサンタクロースの人形が置かれていた。中は多くの親子連れで賑わっていた。

「あ、サンタさんだ！」

その時、一人の男の子がその人形を指さして、嬉しそうに言った。父親がその後ろで彼を見つめながら、微笑んでいた。用事を済ませて外に出ると、雪がしんと降っていた。その隣で、今度は小さな女の子と母親が、誰かを待っているのか、入り口の屋根の下で佇んでいた。デパートの中から、クリスマスソングが流れてくる。

「ねえお母さん、ちゃんとサンタさん、ゆうちゃんのところに来てくれるかな？」

彼女が少し心配そうに、母親に尋ねる。

「そうねえ、ゆうちゃんの良い子だから、きつと来てくれるわよ。」

母親は彼女の頭を撫でながら言った。すると彼女は顔を輝かせて、ひどく喜んでいた。それから二、三分ほどして、彼女の父親と見られる人の車が来て、母娘が乗り込んで、走り去っていった。

白い息を吐き出しながら、ゆらゆらと落ちる雪を遠目に、ふと考える。私は全て知っている。彼が指さしたような、真っ赤な服を着て大きな体をした、彼女が夢見ているような、真っ白で立派なひげをたくわえた、そんなサンタクロースなど本当はいないということを。彼らにとつての実際のサンタクロースは、黒い髪の毛で、普段はスーツに身を包んでいる細身の、家庭を持つ一人の父親だということを。いつか、彼らは必ず真実を知ることになるだろう。心の中にあつた幻想は、現実へと置き換わってしまう。しかしそれと同時に、サンタクロースの体よりも大きな、親の愛情にも気付くのだろう。そして大人になり、愛情を受け取る側から、送る側になって、その連鎖は繰り返されてゆく。私は肩に雪を積もらせながら、クリスマスケーキを持って、家路に着いた。

もう私の元にサンタクロースがやって来ることはない。しかしふと瞼を閉じると、あの聖なる夜の衝撃が、言葉にできない感情と共に微かな体温を持って、茫漠とした中に浮かんでくるのだ。